

千の風になつて

登場人物

保夫 (父)

美緒 (長女)

理沙 (次女)

葬儀屋

舞台奥には小さなテーブルに骨壺と戒名、そしてお鈴(りん)

保夫 ゆりかごから。

美緒 え？

保夫 ゆりかごから墓場まで。

美緒 突然なに？老いてから、社会福祉に目覚めたか？

保夫 いや、前に芝居のセリフで聞いたなあつて。

美緒 芝居？

保夫 そう、何だっけなあ、あれ。

美緒 何処で見たの。

保夫 横浜の・・・

理沙登場、話に割り込む

理沙 相鉄本多、今は無き。

保夫 そう、今は、亡き・・・(泣きそうになる)

理沙 泣かないでよ。

泰明 泣いてない・・・そこで観た、はばかりさん出るやつ、なんて芝居だっけ。

理沙 エキスポ。

美緒 ああ・・・奥さんの葬式に、香典泥棒のはばかりさんが出てくるのね。

ゆりかごから墓場までなんて台詞あったっけ？

理沙 あった。

保夫 確か、葬儀屋がさ。

美緒 そうだっけ？そんな事よりもすぐ来るわよ。

理沙 本物の葬儀屋さん。

保夫 ああ・・・

美緒 (ため息・・・) 何、しよぼくれ。て

理沙 しよぼくれるくらいなら、もっとお母さん大事にしてあげてたらよかったのに。(遺骨の前に行く)

保夫 ・ ・ ・

理沙 あとの祭りだね。(チーン・・・と、お鈴(りん)を鳴らす理沙)

溜息つく保夫・・・一呼吸おいてピンポンとチャイムが鳴る。

美緒 はい。(出て行く)

理沙 お父さん、しつかりしてよ。

保夫 なにが。

理沙 なにがって、これからひとりなんだから。

保夫 そりやあまあ（ごによごによ）・・・
理沙 酔っぱらってそのまま寝たりとか・・・
保夫 んん・・・
理沙 お風呂のスイッチつけっぱなしとか・・・
保夫 あゝ・・・
理沙 さつきもトイレの電気つけっぱなし・・・
保夫 いちいちうるさいんだよ・・・
理沙 （ちよつと大きな声）心配してるんでしょ！

葬儀屋と美穂入って来る

葬儀屋 （大きな声に少し驚き）こ、こんにちは・・・すみません、お取込み中でしたか
美穂 どうしたの、大きな声出して
理沙 あ、いいえ、大丈夫です。すみません、いろいろお世話になって
葬儀屋 いえ・・・あの、早速なんです、明日の散骨の確認を
美穂 はい、よろしく願います。
葬儀屋 ええと、船に乗られるのはご主人様とご長女的美穂様で変更ございませんでしょうか。
美穂 はい、大丈夫です。
理沙 あの、追加料金払っても、もう一人、乗ることできないんですよね。

葬儀屋 はい、申し訳ありません、明日はもう定員いっぱいです……

理沙 いいえ、いいんです、ちよつと聞いてみただけです。

美穂 最近、散骨って流行ってるのかしらね。

葬儀屋 そういうこともあります、明日は本当に、たまたま5組ギリギリのご乗船予定で。

保夫 だったらおまえたち、二人で行ってくればいいさ。

美穂 何言ってるのお父さん、お父さんが行かなくてどうするの。

理沙 そうだよ、ほんとうの、最後のお別れなんだから。

保夫 なんかさ、海に、こう投げるわけだろ……サアッって撒くのかと思ってたんだけど、

そしたら、紙に包んで海に沈めるっていうじゃないか。

理沙 今更……

葬儀屋 粉骨したご遺骨を、そのまま撒くのも違法ではないのですが、いろいろとグレーな部分が

ありまして、水に溶ける紙に包んで撒くようにしています。

保夫 真つ暗な海の底でさ、沈んだままになるんですよね。

葬儀屋 まあ、そうですが……

理沙 全ては、一緒になるんだよ海底で、いろんな分子がくっついたり離れたりして、この世界は

できてるんだから。

美穂 考えてみれば本当に、自然に帰るってことなんでしょねえ。

保夫 あの、葬儀屋さん。

葬儀屋 はい。

保夫 キャンセルできますか？

葬儀屋 はい？

理沙 お父さん！

美穂 何言ってるの。

保夫 キャンセル

理沙 子供か！

美穂 葬儀屋さん困ってるじゃない。

葬儀屋 いえ、大丈夫です。実はけっこういるんですよ、迷われるご遺族の方。

美穂 すいません。

葬儀屋 いえいえ、ほんとに・・・でも、もう前日なのでご料金が・・・

美穂 あ、大丈夫です、予定通りで。

理沙 だいたい、最初に散骨にするって言いだしたのお父さんだからね。

保夫 それは、母さんの遺言だから。

美穂 お母さん、海が好きだったから。

理沙 それより何より、お金ないからね、うち。

美穂 まあね、現実的に、お墓買えないから。

理沙 それ考えて遺言を書いたんだよ、お母さん。

保夫 すいませんね、甲斐性なしで。

美穂 そういうこと言ってるんじゃないでしょ。

理沙 そうだよ、最初は私たちが反対してたのに。

美穂 遺言だからって、お母さんの望みをかなえてあげるんだって、お父さん。

理沙 お通夜の晩から、毎晩口ずさんで。

美穂 そうよ。

理沙 (歌う) 私のお墓の前で、泣かないでください、そこに、私はいません。

美穂 いくら遺言だからって、こういうことは残された私たちの気持ちの方が大事なんじゃないかって反対したのに。

理沙 聞く耳持たなかったから、この頑固親父。

美穂 お墓じゃなくても、最近はお納骨堂って流行ってるんですよ。

葬儀屋 〇〇式の納骨堂ですね、費用も100万円くらいで。

美穂 そう、それ、それなら何とかできると思ってたけど。

保夫 なんだい、あんなマンションみたいなの。

理沙 確かにね、〇〇カード入れると立体駐車場みたいに遺骨が運ばれてくるんですよ、味気ないよね。

美穂 味気ないって・・・供養でしょ。

理沙 供養のし甲斐が無い。

美穂 供養にやりがいとか関係ないでしょ。

葬儀屋 まあ、都会は土地が高いですし、核家族ばかりですから。

保夫 どうして、墓地ってあんなに高いんですか？

葬儀屋 私に聞かれましたも・・・

保夫 葬儀屋さんのせいじゃないですね、すみません。でも、これじゃ、夜の墓場で運動会するのは金持ちばかりですよ。

理沙 それ妖怪。運動会するのは幽霊じゃなくて妖怪です。幽霊と妖怪は違うから。どっちだっていいんだ。言いたいことは、死んだ後も格差社会ってこと。

保夫 そういえば父さん、散骨は、格差社会に対する、抵抗なんだって言ってたね。

保夫 格差社会は、墓場も奪う。地獄の沙汰も金次第。

理沙 金は天下の回り物。

保夫 ならば少し、こちらに回しておくんなせい。

理沙 回せそうで、回しきれない、だから生まれる、格差社会。

保夫 うちなんか、どんどんお金回しているのにさ。

理沙 それ、貯めるお金が無いから、回してるように見えるだけ。

美穂 デフレの時代に、お墓の値段って、少しは下がったのかしら。

理沙 いやあ、下がってないんじゃない。

保夫 どうして死んでもからもこんなにお金かかるんでしょうね。(皆、葬儀屋を見る)

葬儀屋 え？

美穂 いえ、すみません。お気になさらず。

理沙 世の中需要と供給、核家族が増えて、高齢社会になれば墓の値段も高くなるって。

美穂 お父さん6男坊の末っ子だからね、あたしも、理沙も嫁いじやったし。

理沙 核家族の典型だわね、ねえ、お父さんは、死んだときはどうしてほしいの？

保夫 今聞くか?! それ。

美穂 理沙!

理沙 失礼しました。

葬儀屋 ああ、それで明日のことなんですけど・・・

保夫 キャンセルしようかな。

理沙 まだ言うか!

美穂 お父さん、もうキャンセル料じゃなくて料金まるまる取られるのよ。

保夫 金は払う。

美穂 払うって、それあたしたちが出したお金。

保夫 分割で返す。

理沙 何言ってるんだか、年金暮らしが。

美穂 そうよ、それも国民年金だけなんだから、暮らすのもままならないって。

理沙 いつも愚痴こぼしてるのは誰ですか。

美穂 ホント

理沙 まったく、ぬけぬけとどの口が言ってるんだか

保夫 それ、親にパワハラ。

理沙 お父さん!

美穂 (葬儀屋さんに) すいません、お見苦しいとこ・・・

葬儀屋 いえ、大丈夫です。よくあるんですよ、こういうの。まだこちらは良い方で。

美穂 そうなんですか？

葬儀屋 はい、遺産相続の話にぶつかったときなんか、そりゃあもう。

理沙 それは大丈夫。うちには無いからね。

保夫 この家と土地がある。

理沙 二坪で築三〇年、よぼよぼの猫の、額つてとこね。

保夫 狭くたって持ち家。

美穂 ほんと、親子4人よく暮らしたね。

保夫 引越してきた時は、まだお前たち小学生で、新築の家に住いぶん喜んでたじゃないか。

美穂 あのころは小さかったからね。

理沙 身体が小さいと周りが大きく見えるの。

葬儀屋 いや、でもご主人、この葉山に、一応、一戸建てですからすごいですよ。

理沙 一応ね、一応・・・

葬儀屋 あ、いえ、そういう意味じゃ・・・すいません。

理沙 いいのいいの、ホントのことなんだから。

美穂 理沙は学校卒業すると、すぐ出て行ったもんね。

理沙 だって狭いんだもん。会社の寮あつたしね。

葬儀屋 でもうちなんか、マンションですから、いろいろ大変ですよ自治会やら管理費やら。

美穂 そういう点では、三〇年前の選択は正しかったのかもね。

理沙 だけどもう、ボロボロよ、この掘っ立て小屋。

保夫 掘っ立て小屋はないだろ。

葬儀屋 でも、良いですよ、庭があつて。

理沙 庭つたつて、マンションのベランダより狭いし。

保夫 葬儀屋さん、骨を、自分の土地に埋めちゃいけないんですかね。

葬儀屋

はい、私も詳しくないんですけど、法律がそうなっているんです。でもほら、大丈夫だったとしても、やっぱり隣人とのトラブルとか、もし家を売るときとか、いろいろ問題あるんじゃないでしょうか。

美穂 そうよ、お父さん、散骨つて決めたのは、お父さんなんだから。

保夫 違う、遺言、母さんの。

理沙 まだ、そういうこと言つて。

美穂 母さんは千の風になつたんだつて歌つてたのは誰。

理沙 そうそう、お墓に入れたつて、そこに母さんはいませんか。

保夫 でも、海の底に沈めるとは知らなかったんだ。

サツツて撒いて、海流に乗ればさ、その小さな粒は太平洋を漂つて、風のように、地球上のいろんなところに飛んでいけそうな気がするじゃないか、だけど．．．海の底だぞ、海の底、藻屑になつちやうなんて、なんかさ．．．

少しの沈黙．．．

美穂 葬儀屋さん、明日の集合は、葉芝漁港に9時でしたっけ。

葬儀屋 え、ええ、そうです。えっと、それで、これ、明日のご案内と予定表です。天気予報は、

ほぼ大丈夫なんですけど、なにぶん海のことなので、万が一出向できない時は

延期になる場合があることをご了承ください。その場合の費用は掛かりませんので

ご安心ください。あとは、お忘れ物の無いよう、もう一度ご案内の資料をご確認お願いします。

美穂 はい。お世話になります。

葬儀屋 では、乗船名簿には、ご主人様と美穂様のお名前を書いておきます。

美穂 よろしくお願ひします。

保夫 おい、美穂・・・

理沙 お父さん。(たしなめる)

美穂 それで、もし、行けないときは、朝電話しますので、その時は他の方のご迷惑にならないように、
時間になったら出航しちやっして下さい。

葬儀屋 ・ ・ ・

美穂 それじゃ、よろしくお願ひします。

葬儀屋 はい、では明日。港でお待ちしてます。

(終わり)